〔富岡鉄斎展によせて〕

富岡鉄斎筆「濃尾震災図」をめぐって

新聞によると、東海地方に近いうちに大きな地震が起るのではないかと心配されているようです。近代において大災害をもたらした地震としては、何と言っても関東大震災（大正12年）が有名ですが、それより33年前の明治24年（1891）10月28日に起った濃尾地震もそれに次ぐ規模のものでした。

この地震は岐阜市付近で発生し、美濃・尾張地方に被害が集中して、死者7273人、負傷者１万7175人、家屋全壊14万2177戸、同半壊８万324戸、道路破裂２万67か所、山崩れ1万244か所に達しました（平凡社版「国民百科辞典」による）。

富岡鉄斎は濃尾地震の起ったとき、ちょうど名古屋に滞在中でしたが、そのおそろしい体験を明治24年11月15日付近藤文太郎氏宛書簡において、次のように書いています。「……拙生前月彼尾州名古屋ニ而古書画展観会開設ニ被招滞在中、俄然之震動、則旅館ハ懇意人之大家也共、家韻斜土蔵類頽壊大騒動、拙生幸危険相免候、然ル処電線相断郵便所顛倒四方通路塞り近傍死亡負傷如山、眼中惨状筆舌ニ尽難し、帰路無之漸ク本月四日伊勢路へ廻り無別条帰宅、家族一同大安心、毎日毎日見舞人と祝酒之折柄、御国産之品到来大ニ小宴之助ニ相成皆々御厚意重々感銘致し……」。

濃尾地震の被害の惨状は、鉄斎にとって余程印象深いことであったのでしょう。今回の展観に出陳される「濃尾震災図」（紙本淡彩・53×48㎝）は、鉄斎が地震の記憶のなまなましいうちに描き、近藤文太郎氏に送った作品と考えられます。この絵には、「よそことに、火事や地震と、ききすてな、はかりかたきハ、人の災厄　鉄斎」と自賛の和歌が書かれています。濃尾地震を体験したとき鉄斎は56歳でしたので、この絵は世間で尊重される彼の80歳以後の作品ではありませんし、また緻密に描きこんだ記録画でも、大作でもありません。

しかし、この絵は作者の気持のよく出た好ましい小品で、人間の世にいつどんな災厄が起るかもしれないということをしみじみとと感じさせます。

（成瀬不二雄）

濃尾震災図 紙本淡彩 53×48㎝．明治24年

季刊 美のたより №49
昭和54年 11月14日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.